

ヘルマン・シューマッハー 「マックス・ヴェーバー」

小 林 純 訳

凡例

- 1) 以下は、Hermann Schumacher, Max Weber の邦訳である。これは、Deutsches Biographisches Jahrbuch. Herausgegeben vom Verbands der Deutschen Akademien. Überleitungsband II: 1917-1920, 1928 Deutsche Verlags-Anstalt Stuttgart Berlin und Leipzig, S. 593-615 に掲載されたものである。
- 2) テキストをそのまま訳し、訳注n) で訂正、補足をいれた。

マックス・ヴェーバー。経済学者、社会学者。1864年4月21日エルフルトに生まれ、1920年7月14日¹⁾ ミュンヘンにて没。——賛同のみならず、批判や拒絶をも喚起するということが学問的作業の本質に属することだとすれば、そのいずれもがマックス・ヴェーバーにはおよそ異例なまでにあてはまっていた。彼はロベルト・ミヘルスによって、1897年頃から1914年のドイツの精神生活における「最も重要な文化的中心」と、またヘルマン・カントロヴィッツによって「われわれの時代の学問の最大の代表者」と称された。だが一方では、学問を墮落させた者とみなされた。その主著は「誤解された事実素材の膨大な集積」であり、その理論は総じて「死んだ学問」である、とオットマール・シュパンが特徴づけている。この顕著な矛盾は、ヴェーバーの著作からだけでは理解できない。彼にあっては、多くの芸術家におけると同様に、生涯にわたる仕事と運命とが不可分の一体となっている。そしてこのことこそが、上述の矛盾を十分に説明できるのである。

I

マックス・ヴェーバーは1864年4月21日、エルフルトで裕福な両親のもとに生まれた。家族は、父方はビーレフェルト出身であり、祖父はこの地で、聡明な商人意識と厳格な信仰心を併せ持った声望ある麻商人であった。母方はフランクフルト・アム・マイン出身で、祖母はユグ

1) 6月14日の誤り。

ノー家族に生まれ、活発な冒険心と「すさまじく吝嗇な」性格を併せ持つ G. S. ファレンシュタインと結婚した。母の強い人格的な魅力は、家族から受け継いだ深い宗教意識が、決して消えることのない人間的な思いやりの力や、あらゆる美しいものに対する朗らかな感受性と結びついているところにあった。憂鬱のかすかなヴェールがかかっていたかに思われるこうした母の内面的に深く繊細な性格に比して、父は、活力に満ちた陽気な性格であった。ベルリーンの有給市参事となり、また国民自由党の邦議会議員として永年、予算委員会の報告委員 (Berichterstatter) を勤めた。彼はドイツ自由主義総体と次のような運命を共にしていた。すなわち、自らの活動したいという切望が根本的には満たされぬままであり、そのことを通じて、自由主義本来の性質とは必ずしも一致しないある種のレントナー的性格を次第に帯びていった、という運命である。母が教養のある人々のグループを自己の周囲におくことができたように、父は知り合いの政治家たちとの交友を好んだ。中でもモムゼンとリッカートがこの知人サークルに属していた。マックスは6人兄弟の長男として、こうした家庭に育った。この家は職業活動の喧噪とはほとんどかかわることがなく、その精神的な豊かさと政治的関心の高さにおいては、ベルリーンでもこれに比肩しうる家は多くはなかった。

1882年にヴェーバーは大学へ進んだが、はじめにハイデルベルクへ行き、ここで色リボンを付ける学生組合に加入した。次にシュトラースブルクに行き、ここで軍役義務を果たした。関心が並外れて多面に渡りはしたが、彼は法学研究を決意した。当時法学研究が公的活動への入り口だったことは今日の比ではなく、また同時に、モムゼンを通してヴェーバーに身近となっていた古代世界とは、ドイツ市民法典制定以降の場合よりも遥かに直接的に関連する分野なのであった。ここに根ざす強い関心のゆえに、彼は法学研究を終了させたくなかった。当時すでに彼自身の内面から育ってきた研究への衝動は、彼がつねに制約と感じていた外的な義務よりも強かったのである。

ベルリーン大学の法学者の中では、当時商法の第一人者であるレヴィン・ゴルトシュミットが最も俊敏な頭脳の持ち主と目されていた。彼の概念的分析の技法は、ローマ法学者としての構成力とともに、ヴェーバーに強い影響を与えた。このことは後のヴェーバーの法学以外の著作においてすら明瞭にその跡を見ることができる。だが彼をより強く捉えたのは、『商法の普遍史』の編者としてのゴルトシュミットである。発展という考え方を国際的商法全体に拡張するというこの大胆な試みは、ヴェーバーを協力者へと誘った。彼はベルリーンにある印刷されたイタリア語およびスペイン語の史料に基づいて、ローマ法の古いソキエタスとは対立する形で初期中世に形成された新しい商事会社が、たしかに経済活動の新たな必要性から生まれたにしても、しかしどの程度まで古い法制度に結びついていたのか、ということをはっきりとする研究に着手し、とくに合資会社と合名会社の対比を歴史的に鋭く浮き彫りにしようとして試みた。師の研究がいささか断片的なものだったように、『中世商事会社の歴史』とヴェーバーが名付けたこの著作も、完結したものとはならなかった。ヴェーバーは、これを仕上げる多大な努力が

ほとんどやりがいのないものだ、とたえず感じていた。それでもこの研究は、この若き司法官試補が1889年にベルリン大学で法学博士の学位を得る助けにはなった。そして当時はまだ学位授与の際の義務であった公開討論の席上、ヴェーバーの望みに応じて反対討論者の一人として登場したモムゼンが、その発言を、自分の後継者としてはマックス・ヴェーバー以上に好ましい者を知らない、と宣言して閉じた時、広い範囲の人々の注目が初めてヴェーバーに注がれたのである。

ヴェーバーの精神的発展に対してモムゼンほど著しい影響を与えた人物は、まずいないであろう。モムゼンもまた法学者として自己の学問的キャリアを始めた。ヴェーバーにとってのモムゼンは、まずもって、かつて若き日にローマ史を怒濤の創造力で描いていた魅力ある著述家ではなかった。歴史叙述家モムゼンに対しては、ヴェーバーはむしろ様々な疑念を抱いていた。彼の強い「歴史像の主観化」は、ヴェーバーをあらゆる歴史叙述に対して懐疑的にすらしていたのである。彼がまさしくモムゼンに見たものは、歴史叙述とはそれが描く時代の人為的模写像であるにとどまらず、執筆された時代を支配し、執筆者を突き動かしている時代観の自然な反映像でもある、ということであった。ヴェーバーにとってのモムゼンとは、まず第一に成熟した学者であった。すなわち、歴史叙述から離れて、『碑文集成』Corpus inscriptionum²⁾の作成者として比類なき批判的史料収集作業を行い、自らそこから絶えず新たな成果を、多数の論文において、また3巻のローマ国法の中で、学界に提起した人物なのであった。この骨の折れる細かな作業が天才的な直感や類い希な叙述力に勝ったことのうちに、ヴェーバーは、諦観に満ちた浄化の一過程を見た。それは真摯な学問なるものの英雄的模範として、生涯にわたって彼の脳裏を去らなかつた。これに劣らず彼に影響を与えたのは、老年に至るまでのこの厳格な学者たることと、たとえ実現の見込みが少なかるうとも自己の理想を大胆に掲げる情熱的政治家たることとが、結びついていたことである。ここにもヴェーバーは、英雄的なる何ものかを見たのであり、これに驚嘆を惜しまなかつた。

ゴルトシュミットにおけると同様、モムゼンの場合にもヴェーバーを惹き付けたのは、具体的にはとくにますます明確な形をとって現れた普遍史的特質である。これは専門諸科学の制約を無視してついには古代世界全体を包括するに至った。しかしヴェーバーは、モムゼンのこの大作には、経済的観点から見て一定の欠陥が見出せると考えた。とりわけローマの農業史においては、個々の法的規定が直接的利害関係者に与えた実践的意義が説明されていないことを不満に思い、また他面でロードベルトゥスの先験的仮説が細心の注意を払って根拠付けられてはいない、と感じたのである。彼は農業研究の最新の成果をローマ史の史料研究と直接結び付けようとした。この理由から彼は、学位取得の後に、アウグスト・マイツェンのゼミナールに参加した。マイツェンは当時、普遍史的著作『西ゲルマン、東ゲルマン、ケルト、ローマ、フィ

2) 『ラテン碑文集成』Corpus Inscriptionum Latinarumのこと。

ン、スラヴの居住と農業制度』の準備にちょうど手を付けたところであった。ここでヴェーバーの経済的な関心が初めて深く根付いた。農業史の研究により、ヴェーバーは1892年ベルリン大学のローマ法・ゲルマン法、商法の私講師となったが、この分野がヴェーバーの生涯のテーマとなった。彼がここほど専門家である分野は他にはない。

農業の分野ほど古代と現代が近接しているところはなく、両者はヴェーバーにおいて手を繋ぐこととなった。というのも、彼の職位請求論文『ローマ農業史 国法と私法に対するその意義』(Stuttgart 1891)が出来上がったまさにその時、社会政策学会が、ドイツ農業労働事情についての大規模な調査を行い、その最も重要な部分、つまり東部ドイツについてまとめるという課題を彼に依頼してきたのである。彼は以前より、ポーゼンでの軍事教練を機に、プロイセン東部の事情についてすでにいささか通じていた。彼はその歴史的教養、経済的専門研究、政治的関心、生き生きした観察力の故に、この新たな重要な作業を引き受ける人物としてはとりわけ適していた。彼はこの作業に専念没頭し、刊行されたもので見ると八百ページを超える著作を一気に書き上げた。その成熟度、まとめり、明晰さの点では、彼が二度と再びここまで到達することのないものであった。この作品はただちに学界、政界、経済界におおきなセンセーションを巻き起こした。ドイツ農業史に最も通じていたG. Fr. クナップは、社会政策学会の大会席上、ヴェーバーの研究は「われわれの知識はもう通用しない、われわれは最初から学び始めなければならぬ」という印象を与えてくれた、と発言した。

ヴェーバーが1889年から1892年に刊行した古代、中世、現代をそれぞれ扱った3冊の書だけを見るなら、この著者が専門化を急速に進める途上にあった、と考えることも可能である。だが事は決してそうではなかった。まさにこの時期ヴェーバーは驚くべき普遍性を発展させていた。彼は文化諸科学のほとんどすべての大問題に積極的な関心を持って取り組み、時代のほとんどすべての重要な問題に対して重みのある態度表明を行った。このことは、当時極めて活発だった新興のいわゆる国家学連合において示された。ヴェーバーがここでその射程の長い視点、分析の営利さ、当意即妙の会話の明晰さによって指導的地位に登っていった様子は、どの会員にとっても忘れがたい体験であった。彼の鋭い挑戦、ときに仮借のない挑戦に必ずしもつねに同意できなかったにせよ、会員のうちで、ヴェーバーの持続的な励ましを受けなかった者はまずいないであろう。そしてたいていの者は、当時、厳格な学問という足枷のもとには長いこと想像だにしえなかった彼の活力に対して、何らかの形での政治的なキャリアをその将来に期待することとなった。彼自身もまたそう望んでいたように思われる。ことに、ビスマルク以降の最も重要な大臣であるミーケルが彼に注目してからは、なおのことそう思われた。

たしかに、多くのことは時代のもたらしたものであった。前世紀の80年代にドイツは、帝国建設という準備期間の後、成熟の危機の時代に突入した。社会問題は学界の若い世代を深く突き動かした。女性問題が公然と世に出てきた。社会主義は成長して力をつけた。教会は状況の変化の中で影響力を得ようと奮闘した。そしてドイツが世界経済へとますます編入されてゆ

くことで、これまで知られていなかったような諸問題が生じてきた。小市民層の精神的偏狭さを脱して自由な視界の高みに立たねばならぬという感情が広く支配した。こうした一般的な時代の希求がヴェーバーのうちに最も強く体現したのである。彼はベルリンで恵まれた条件のもとに、この変化を体験した。彼は人生の最も吸収力に富んだ20才代のすべてをなおも内面的成熟に捧げることができるという行幸をえて、自己の豊かな才能を生かした。彼を満たした精神生活の密度は、その後二度と達することのできない高度なものであった。それは喜びのない机上の学問、苦惱、虚飾など無縁であり、尽きることのない泉が苦もなく湧き出るかのごとくに思われた。

とはいえこの喜び溢れる創造力には、満たされていないという深い感情が結びついており、それは彼の性格に不安に満ちた奇妙な特性を刻印していた。自らの主導性を必要とせず、せわしなくも無益な司法官試補の職からしてすでに、活動的人間には重荷となった。そして30才になるまで収入もなく両親の家で暮らすことを彼は不自然で不名誉なことと感じていた。「自分で稼ぐことは人間にとって幸福の基盤である。」無給の待機に耐える司法官試補見習や、試補の地位から同様に無給で待機の私講師への転身もやはり何の解決策にもならなかった。さらに待つことは耐えられなかった。それゆえ彼は、実践的活動への転身を本気で考えた。彼はブレーメンの商業会議所で空席となった法律顧問職に応募したが、無駄であった。彼はまた時々、ベルリンでも最も傑出した弁護士の一人である枢密顧問官フォン・ジムソンの代理を勤めた。ジムソンについては、彼はいつも感謝を込めた満足の気持ちを持って語っていた。そこに1893年、最初の転機が訪れた。ゴルトシュミット教授が病気になり、ヴェーバーは助教授に指名され、しかもゴルトシュミットの代理を委任された。これによって彼は長いことその欠如感に悩んでいた独立を、突如として獲得した。ただちに彼には重要な新課題が持ち出された。それは、同年に帝国宰相によって設置されていた取引所調査委員会に関するものだった。大きな政治的意義を持つこの困難な問題に、彼が全精力を注いだのも当然である。専門家の尋問の議事録が提出されるや彼はただちにその検討に没頭した。この研究から生まれたのが「ドイツ取引所調査の結果」と題された一連の論説であり、彼はこれを、ゴルトシュミット編集の『商法雑誌』に、しかも論稿全体が書き上がる前に、公表しはじめた。ここでもまた彼は自らの目標を極めて高く定めた。彼は取引所制度の端緒から現在にいたるまでを、そしてあらゆる国々でのそれを把握しようと試みた。この目標は、以下に記すような諸原因から全面的に達成されはしなかったが、調査との関連で公表されたヴェーバーの研究が極めて価値あるものであることは疑いない。

ヴェーバーがこの新たな活動に充分精通する前に、第二の転機が訪れた。フライブルク大学の経済学の教授職は、フォン・フィリポヴィッチが占めていたが、彼がヴィーン大学に招聘されて空位となり、この職がヴェーバーに提供されたのである。こうして彼は、法学が経済学かという岐路に立たされた。この決定は人生経路の決定であった。にもかかわらず彼にはそれほ

ど困難とは思われなかった。

商法は当時、取引所制度改革のような大きな実践的課題をそれほど抱えているようには思われず、ヴェーバーは職位請求論文以来、法史的関心を大幅に失っていた。これに対して経済学は、当時の内外の政治的に重要な諸問題と密接に結びついており、国際的に広がり始めていた。それゆえ経済学への転身それ自体は容易だったのだが、しかしベルリンからの退去のためにヴェーバーは外的困難を体験した。だが、このとき父の弟の孫であるマリアンネと結婚していたヴェーバーは、一定の内面的な休息の必要を感じていたと思われる。彼は、当分の間は帝都の政治的な喧噪を避けることが明らかに救いとなると考えた。こうして彼は喜びと誇りに満ちてフライブルクへと移った。

この地で彼を待ち受けていたのは困難な課題であった。彼は、強い関心は持っていたものの、およそ体系的訓練を受けてこなかった分野を勤めねばならず、しかもその際、いつものように極めて高い要求を自らに課したのである。彼は新たな道を進んで、あらゆる問題を、あらゆる時代、あらゆる民族について普遍的に掴もうとした。こうして新たな学問の諸問題との壮絶な格闘が始まった。彼の講義のもつ強い魅力はここに理由があった。講義は著しく博識ではあったものの決して死んだ知識を示すものではなかった。だが、学問的あるいは政治的な論議でなら、ヴェーバーの学識と本質は自由に現れはしたが、特定の主題を扱う専門的講義の強制は、重圧を持って彼の活発な精神を教壇へと緊縛した。彼は自ら課した課題を果たせなかった。学生から見ると、並外れた人格という印象に、未熟さと不可解なものという印象が結びついていた。確固たる体系的構成と明晰な形式とが欠けていた。完成した構成ではなく、無数の、刺激に満ちて切り出された石材の山であった。

当然のことながら学問的生産も行き詰まった。取引所の研究はおよそ苦渋のうちに終わった。その主たる作業は商法雑誌で3年(1894-96)に及び、しかも明らかに断片的な性格を帯びていた。それでもゲッチンゲン労働者文庫の一冊として出された見事な短い要約 これも3年にわたったが だけはまとまったものになった。ヴェーバーが取り組み始めたのは別の諸問題であった。

II

法学部から哲学部へと鞍替えしたことにより、ヴェーバーは、当時ドイツの経済学を二分していた方法論争に対し、突如として態度決定を迫られた。一面的なシュモラー支持とか、あるいはその論敵を支持するということは、彼自身の経歴や、また彼の新たな講座の伝統とも矛盾したことであろう。というも、たしかにヴェーバーは歴史研究を行ってきたとはいえ、彼はベルリンの歴史学派経済学の先駆者たちの影響に対しては、たとえ著作ではごくまれにしか言及していなかったにせよ、常に批判を持って相対してきたからである。そして彼のフライブ

ルクの前任者は、他の誰にもまして、ベルリンとウィーンの敵対する両学派を仲介しようと試みていた。だから形式的にヴェーバーにかかってきたのは、そもそも経済学に於ける歴史学派と理論学派の対立は、それがシュモラーとメンガーの激しい闘いに表われたような、それほど実際に大きなものなのかどうか、という問題であった。

新たな勤務のためにヴェーバーは、この大きな問題 以前の学友であり、今では同僚となっていたハインリヒ・リッカートがちょうどこの当時主要関心に向けはじめていた問題でもあるのだが にも、フライブルクではいまだ決着をつけられなかった。ハイデルベルクで初めて彼はこの問題に没頭した。

この地でヴェーバーは、1897年、歴史と理論を決して対立とは見ない旧歴史学派の最後にして最も重要な主唱者であるクニースの講座を受け継いだ。彼は故人となった前任者の学問的立場を根底より明確にすることを名誉ある義務と考え、そこからおのずと、しかるべき考慮も長らく払われずにいたこの学派の方法論的著作の検討へと向かった。同時にヴェーバーは、ハイデルベルクで新しく同僚となったヴィンデルバントを通じて、1896年に出版されたリッカートの著作『自然科学的概念構成の限界 歴史科学への論理的序論』に初めて深い考慮を払うようになったようである。

しかし重い病気になったことは決定的であった。

新たな教授職の任務に苦勞して精通することや、いまだ慣れぬ職務の絶えざる圧力、以前からの多くの関心をどんどん膨らませたことなどが、父親の予期せぬ死にからんで生じた激しい精神的動揺と重なり、1897年には完全な衰弱となって現われる崩壊をもたらした。この崩壊は非情な陰しさをもって生き方全体の変更を強いた。それまでヴェーバーの最も耳目を引き付けた性質といえば、恐るべき知識を蓄えるにとどまらず、すべてを深く理解して批判的に新たな問題設定にまで加工するという、常人の理解をこえるほどの精神的消費力であった。それが今では、一切のまともな読書が数年にわたって不可能となった。彼の活動の源がすべて断念されねばならなかった。とりわけ政治的なキャリアを考えることなど全く放棄され、また直接的な人格的影響を広く及ぼせるのではないかという他の期待もすべて葬られた。ヴェーバーは教師活動すら諦めねばならぬと考えた。彼は教授職を辞任した。

これまで無限とも思われた彼の活力は、あらゆる職業的専門化が要請する断念に抵抗し、豊かな全人の人間類型を可能にしてきた。今や運命はヴェーバーにも禁欲を強いた。彼は、時代が絶えず新たに提起する実践的課題に喜んで取り組むことなど、もはやできない。彼は研究者たらねばならない。これまで彼にとって第一義的には目的のための手段であったものが、今では自己目的にならなくてはいけない。そうして彼は研究者としても断念せねばならない。彼は、まずは静かに自省することが必要だと考え、長き沈黙の中で自らを省察対象とした。彼は、自分がこれやあれをなぜ真と考えるのか、これやあれがなぜ自分を楽しませてくれるのか、と問うた。目標を、それに至る手段も知ることなくしばしば明瞭に見通す確かな本能、天才的な直

感の人が、知識のどんなにささやかな一歩に対してまでも徹底した弁明を与えようと試み、そうした究明のうちに力を消尽させて、自己の認識の展開や普及に対してはとりわけに関心を持つことのない、自虐的な懐疑論者となったのである。

この悲劇的な旋回は、ヴェーバーをまずは方法論者となした。だが、たとえ彼が自己の内なる最良の力を、自分の性格にそもそも反するような仕方でも抑制しようとしても、やはりかつての創造力が結局は運命に打ち勝った。ヴェーバーは、強いられた変更に適応した新たな活動分野を自ら創出し、また一切の職務からの解放によって、分業のあらゆる制約が強制的な意味を持たない豊かな人間類型の新たな姿を身にまとうこととなった。病気がなければヴェーバーはおそらくは学問から遠ざかっていたかもしれない。あるいは少なくとも学問的課題のために、そしてとくに大学の教師業務の外にある諸問題を取り扱うことのために時間を割くなど、できなかったかもしれない。病気を通して、それまで学問に押し込められていた彼の創造性は、初めて唯一無二の刻印を存分に与えられた。

だが一つの裂け目が彼の展開の全体に走っている。これまで、彼の人格と作品は一体をなしていた。いまやこの一体性が割れた。人的な交流の場では、なおも彼の溢れる直感的な本性が作用していた。だが彼がひとたびペンを握るや、以前と同様に講壇に立つがごとくとなることが多かった。彼は自らの精神の明敏さをすべて自らに向けた。たしかに、いつもそうなるということではなかった。元来の性格は再三、苦難のあらゆる鎖をものともしなかった。だが新鮮さと喜びとが彼の活動から消えた。だんだんと否定的なもの、分裂したものという印象が勝っていった。学問にはもはや真理の顕現を見ることなく、学問外的な目的設定のための手段のみを、そしてわれわれの「神遠き」時代の一表現を見る全般的な諦観が、自らの宿命に対する個人的な諦観をますます押し退けて現われてきた。かつてはヴェーバーは感激をもって学問の腕の中に身を投げ出していたのに、その感激はいまでは、内面的な義務感から生まれた「知的誠実さ」の活動に場を譲った。この知的誠実さは、彼がかつて成熟したモムゼンのうちに驚嘆したものよりもずっと苦悩に満ちた内面的英雄性を必要としたのである。

III

2年近くをローマで過ごした時期を含めて約5年の後にようやく、ゆっくりとヴェーバーの創造力はもう一度強まっていった。1903年、彼は長大な論文「ロッシヤーとクニースおよび歴史的経済学の論理的諸問題」を『シュモラー年報』に公表し始めた。この「ため息の出るような論文」作成の苦労は外面的にはすでに次のところに現われていた。つまり、ヴェーバーは一切の職務負担から解放されていたのではあるが、論文の刊行は4年の期間（1903-06）にもおよび、読者に対しても苦渋に満ちた仕方でも伝えられたのである。取引所に関する諸論稿で示されていたことは、ここでは病的に高められて現われている。そこには疑いなく、脱稿前に刊行

が開始されたこの作業が、締切のある義務的仕事として彼にのしかかっていた、という事情が作用していた。

それゆえ、エトガー・ヤッフェ (DBJ, 1921, S. 160ff. を見よ) が1904年に、それまでハインリヒ・ブラウンの編集していた『社会科学・社会政策アルヒーフ』を買い取り、三人の新編集者の一人としてヴェーバーを招き、この雑誌を彼の学問的作業の自由な舞台として用立ててくれたことは、彼にとってひとつの慰めであった。このことによって、研究者の仕事の強いられた独立は、再び栄誉ある目標を得た。直接的影響は広く発揮されぬかもしれないが、それでも自分の雑誌は間接的影響のための感謝すべき活動舞台となった。こうしてようやく彼の人生は新たな抛り所と刺激を得たように思われる。

このことはただちにヴェーバーの執筆活動に示された。それは健康のますますの回復とともに再び活気づき始めたが、このたびは病気以前とはおよそ違った方向に進んだ。

経済学的研究、法史的研究はこれ以後は後景に退いた。ただ古代農業史研究、とくに国家学辞典の内容豊富な項目は、いまだ分裂の面影を忍ばせている。それと同類のものとしては、後の、工業労働者の「選択と適応」に関する社会政策学会の調査に関連した準備的研究「工業労働の心理物理学」がある。そこでは、彼のビーレフェルトの親戚の工場で得た個人的な経験が、彼のハイデルベルクの同僚クレペリンと彼の学派の著作に負うべき刺激と一体になっていた。この研究においても本来の経済学的関心は以前よりもずっと後退していた。これらは、いわば克服した活動期の遅れた余波に過ぎない。今や全く別の関心が前景に現われていた。それをただちに最も明瞭に示すものが、1904年に成熟するに至った、静かな苦難の時代に由来する二つの重要な成果である。人はそこで、いかに尋常ならぬほど深く考えられた意味がそこに込められているかを見ることになる。推論や定式化のあわただしさも、ここにはない。慎重に育まれた思考が慎重な形式をまとっていた。

他のどの作品にもましてマックス・ヴェーバーの名を学問的世界に広めたのは二つの論文である。それはまず、装いを新たにした『アルヒーフ』の巻頭論文である「社会科学および社会政策の認識の客観性」と、第二に「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の『精神』」についての研究である。この二論文は同時に、二つの大規模な学問研究シリーズに対する印象深い序曲をなしており、この二つのシリーズが今ではヴェーバーの生涯を通じた学問的主要内容となっている。

初めに方法論的研究に関して述べれば、それは二つのグループに分けられる。第1のものは個性化的歴史科学に関わるものである。ここでヴェーバーは、すでにモムゼンについて行ったごとく、今度はエドゥアルト・マイアーについて、またそれに劣らず、シュモラーを例とした社会科学の領域において、この領域に必要と思われる概念構成の厳格さを検討した。このために彼は、ヴィンデルバントとリッカートに刺激を受けて、十分に展開された「自然科学的認識の純粋型」に、同様の高度に展開された「文化科学的認識の純粋型」を対置しようと苦心し

ている。この試みの中で彼は、かなり重要な点でリッカートと分かれた。というのも、彼はたしかにリッカートと同様、自然科学的認識と文化科学的認識の間に深い相違を見てはいるけれども、しかし彼は、あらゆる客体について一般化的概念構成が可能である、との見地を主張しているからである。なぜなら、学問的作業過程はつねに等しいものだから。つまり「経験的事実的なもの世界を思考上の関連へと変換する」ことがつねに問題なのである。つねに人為的「単純化」が追求されねばならない。単純化し、明確に限定された一般性の助けを借りることによって、個性的なものの意義が初めて十分に把握されうるのである。こうしてヴェーバーは「理念型」の理論に到達した。

すでにこれまでも、歴史的諸事実を体系化する試みがないわけではなかった。それはとくにビューチャーによって一般史の領域へと深く持ち込まれており、またそれにはエドゥアルト・マイアーとゲオルク・フォン・ペロウ（1927年没）という厳しい批判者が現われていた。とりわけマイアーは、ビューチャーの類型化を厳しく拒絶した。このことがヴェーバーを舞台に導いたのである。彼はすでに以前より、近代ないし中世から採られた経済的諸範疇によって古代の歴史を整序することは不当である、と考えていた。彼は、本当に古代を「およそ近代的ではなく」想像できるのか、そして古代ギリシアにおいて例えば「資本主義」を論じうるのか、そして最後に古代と近代の相違は経済的にはどこに存するのか、と問うた。そうして彼は以下の結論に至った。それは、こうした問いが満足すべき答を得るためには、歴史は、「文化諸現象の特性を自覚させる」明確な概念構成によって研究されなければならない、というものである。歴史は、経済学が例えば価格理論でやっているのと同様に、「歴史的生の特定の諸関連と経過を、一個のそれ自体として内部に矛盾のない、思考上の関連というコズモスへと結び付ける」ような「思想像」から出発せねばならない。この思想像が経済学では経験から得られた事実 reliant しなければならぬのは確かである。それが有効に行われるほど思想像の有用性は高くなるが、その場合でも、「個々の観点の一面的な高揚」が行われなければならぬ。それが例え極めて様々な非合理的価値前提の上に構成されうるにせよ、それ自体としては「目的合理的」ないし「価値合理的」に仕上げられねばならない。これが「無矛盾性」ないし「純粋性」と特徴付けられるがゆえに、ヴェーバーはこれを、すでにイエリネックが一般国家学の中で行ったのに倣って、「理念型」と名付けた。これを用いることによって初めて、歴史的に具体的な現象の特殊性が明確に打ち出されることとなる。つまりこの特殊性は、合理的な「理念型」からの非合理的な偏差より成っている。こうして「理念型」は有効な個性化の手段たらんとする。それは経験的現実を模像するのではなく、現実をただ「妥当性のある方法で思考によって整序する」手助けとなるべきなのである。それは「限界概念」なのであって、これに即して現実が「測定」され、これを用いて現実が「比較」される。それは「学問の表現手段」を創り出すべきものである。この手段を欠いていたことが、これまで歴史的研究の学問的価値を損なってきたのである。

この類型化の方法は、経済学の古典学派によってすでに自覚されることなく用いられてきたし、アドルフ・ヴァグナーにはすでにはっきりと意識されていたものであるが、病後のヴェーバーの学問的作業を高度に特徴付けるものとなっていた。彼もまたこの思考を理論的にも実践的にも鋭く彫琢することによって当時の学問に影響を与えたことは疑いない。フォン・ペロウも、ヴェーバーの言う意味でのこの理念型の導入を、歴史学にとって一歩前進であるとして歓迎していた。

しかしながらヴェーバーはこの方法を、例えば経済史などにのみ適用したのではなかった。それを明らかに限界的な事例において検証することが、彼をとりわけ魅了していたように思われる。彼は自らの宗教学的的研究において、教会やセクト、修道会、また呪術者や聖職者といったものの合理的な理念型を構成することに尻込みしなかった。そこには現在では概念的な矛盾が現われている。しかしつねに認めておかねばならぬのは、理念型的な構成をとることによって初めて、ヴェーバーが行ったような大規模な普遍的比較がなされる、ということである。

こうした中でヴェーバーの方法論的研究はさらに第二の方向を採る。さらなる論争がその移行の機会を与えた。シュタムラーが1906年に『経済と法』の第2版を刊行したのだが、このテーマは、いわばヴェーバー生涯の内容となった。それゆえこのテーマは、彼の本質の深みに触れたのであり、シュタムラーがその書で社会主義をめぐる論戦へと断固踏み出そうと試みていたがゆえに、いっそう高揚させられた。このことから、ヴェーバーが1907年に『アルヒーフ』に掲載した論文「シュタムラーの唯物史観の『克服』」でシュタムラーと対決したときの激しさが説明される。この激しさたるや、ヴェーバーにとっても尋常ではなく、後に彼自身も遺憾としたほどのものであった。彼はこの書のうちに経験的認識と規範的科学の許されざる混同を見て取り、「経験的思考の法ドグマ的変造」を根底的な批判的議論に付したのである。とくに彼は唯物史観を、それだけでは決して適用されるべきではないけれども他の方法と共に用いられれば旨い成果を上げうる一つの発見的手段とみていた。

だがヴェーバーは、法学の領域で注目というよりはむしろ憤激を喚び起こしたこの批判を、なにか積極的なもので補っておくことが必要だ、と自分でも感じた。こうして1913年『ロゴス』誌掲載の論文「理解社会学の若干のカテゴリー」が生まれた。これは、シュタムラーが「言わんとしていた」ことを示すのが一つの目的であった。この論文は、ヴェーバーの個性化的歴史科学から一般化的歴史社会学への本格的移行として特徴づけられる。両者間の違いをヴェーバーは、(のちの弟のアルフレートとは違って)一方での自立した全体的発展と、他方での個人の行為という、両者あいまって多様な相互作用を成している事象的諸契機には見ていなかった。彼は相違をもっぱら考察様式のうちに見たのである。つまり、本来の歴史科学が一回性の経過の説明に限られるのに対して、社会学は歴史的生起のうちに「一般的規則」を求める、というのである。その際に、もし漠然とした一般性に収まることに甘んずるのでなければ、社会学は、本来の歴史科学におけるよりもさらに諸要素へと遡らなければならない。ここでは「理念型」

をその構成要素へと分解することが必要となる。

とりわけ経済学についていうと、それは「社会的諸現象の総体が、どのようにして経済的諸原因によって規定されるかを研究する」べきであるにとどまらず、さらに宗教や法、国家、芸術、科学等々といった「社会的諸現象によって、経済過程および経済形態が規定されていることを調べる」べきである。前者は本来の経済学の枠内であるが、後者は社会学に属し、それゆえこの社会学が、ジンメルの言う意味での「ゲゼルシャフト結成の諸形態」のみならず、それらの文化内容自体をも扱うのである。ヴェーバーは、文化的諸現象の個別分析を通してのみ学問的な進歩が果たされる、と考えた。彼は最初に宗教へと向かった。

ずっと以前よりヴェーバーは宗教的な問題には関心をもっていた。これも両親の家系から彼に伝えられたものである。すなわち、父の家族にはビーレフェルトの敬虔主義が息づいていたし、また慈善活動に勤しむキリスト教の精神が母の心をたえず満たしていた。母の姉は歴史家バウムガルテンの妻となっていたが、彼女はヴェーバーのシュトラースブルクでの軍役期間中、彼に宗教的な読書材料を世話してくれた。そして彼女の息子、著名な神学者であるオットー・バウムガルテンは、当時彼と非常に親しく、オットーはのちに彼を博士審査口頭試問の対席討論者の一人に選ぶほどであった。フリードリヒ・ナウマンおよびパウル・ゲーレと交友関係が生まれたのも、おそらくはオットーを通じてのことであっただろう。とりわけナウマンは、1894年に彼が創設した雑誌『ヒルフェ』によって広範なドイツの若者層の心を熱くしていたが、その彼がヴェーバーに強い関心を抱いていた。というのも、ヴェーバーは、社会主義がキリスト教の助力によって統治能力をもつようになり、自力では勢力を伸ばせない自由主義の同盟相手となることを期待していたからであった。病気の後にはここでもまた、政治的志望が学問的な問題設定に交替してしまった。

ビーレフェルトの親戚を訪問した際、すでに「敬虔主義的な労働力の独特な適性」はヴェーバーの関心を惹いていた。その後フライブルクに移ったとき、キリスト教の宗教制度の特徴的な相違が彼の心をとらえた。そして彼は、とりわけ詳細なバーデンの宗教統計に基づいた、信仰と社会的成層化に関する研究を学生に行わせた。だが決定的だったのは、彼の病氣中にゾンバルトが『近代資本主義』を1902年に刊行し、そこで「資本主義の起源」に関する問いを提起したことである。ゾンバルトは、いまだカール・マルクスの言う意味で与えられた解答を採ったために、種々の面で著しい矛盾を引き起こしていた。この論争に対してもヴェーバーは熱中したが、彼にとっての問題設定は変化した。というのは、青島（チンタオ）占領によって東アジアの諸問題が政治的そして学問的に彼の視野に入ってきて以来、彼にとっての問題は、「資本主義はどのように成立したのか」から「なぜ資本主義はヨーロッパとアメリカで発生し、アジアやアフリカでは発生しなかったのか」という問題に転換したからである。そしてゾンバルトがいまだマルクスの魔力のうちにあって資本主義の「精神」を経済的諸関係の産物として捉えたのに対し、ヴェーバーは逆に、イデオロギーがいかに経済生活に作用するのか、について

深く考えた。

すでにサー・ウィリアム・ベティは、17世紀のオランダの経済力を「労働と営利努力を神に対する自らの義務とみなす」「非国教徒」がオランダではとりわけ多かったことに起因させていたが、これはちょうどビーレフェルトの企業家と労働者が様々に今日でも行っていたのと同様である。ヴェーバーは、これがどう説明されるのかを問題にした。そして彼は、「近代資本主義」の最初の担い手に対するこの特殊な刺激が、此岸にあるのではないことを理解した。労働意欲をそれまで知られなかったような形で登場せしめたのは「彼岸の報賞（プレミア）」なのであり、しかもプロテスタンティズムこそが天職としての労働という見方を初めて成立させた。プロテスタンティズムは、人は自らの職業義務を遂行することによって神に仕える、と説くことによって、近代的職業労働に刻印を与えるキリスト教的禁欲の精神を生み出した。とりわけカルヴィニズムにとっては、利潤追求がなにか神の意志にかなうものとなった。こうしてヴェーバーは上掲論文「プロテスタンティズムと資本主義の『精神』」で、カルヴィニズム的な生活観が資本主義を生んだ、という結論に至った。そして資本主義は、ひとたび姿を現わすと、こんどは自立的にさらなる発展を遂げることができたのである。

ヴェーバーの作品の中で、これほど魅力的といえるものは他にない。類似の体験をしたものだけが、プロテスタンティズムの職業思想にある「世俗内的禁欲」の生成と帰結とを、かくも生き生きと叙述することができた。ゾンバルトがなおも根本的には賞賛していた唯物論的歴史解釈の独壇場に対して、ここに一つの対抗物が提起された。これほど有効なものはいまだかつてなかったのであるが、ともあれ思考過程はここでも一面的に先鋭化されていた。というのも、カルヴィニズム＝ピューリタニズムの精神が資本主義の発展に対して大きな影響を与えたのは確かであるにせよ、カルヴィニズムがなければ資本主義も決して成立しなかつたろう、という蓋然性は低いからである。だがヴェーバーは、これまでおよそ無視されてきた関連を孤立化的方法を用いて強調しようとしたのであり、そして厳格な孤立化は必ずや誇張的に作用するものである。

まさにそれゆえにヴェーバーは、賛同や感嘆と同時に、多くの反論をも受けた。たしかに唯物論的社會主義やそれに近い学問はあきらかに怖じけづいて引き下がった。しかし新ランケ学派の歴史家の中からは、ラッハファールの指揮の下に激しい反論が鳴り響いてきた。ヴェーバーをその宗教学的の研究の道へとさらに突き進ませ、ついにはその研究があらゆる国と時代を被うまでに至らしめたのは、まずもってこのラッハファールである。その際、世界の大宗教諸体系をすべての面にわたって叙述することが彼の意図でなかつたのはもちろんである。彼が関心を寄せたのは、社会生活に対する宗教の関係についてのみであり、諸宗教の経済倫理のみを扱おうとした。この目的に向けて彼は、再び強まってきた精神的消費力をもって、想像を絶するほどの範囲の文献を研究した。このような全世界を包括する様々な素材を撰取したものなど、それまでほとんど誰もいなかつたであろう。このことからしてすでに、ヴェーバーのこの研究

を評価するのは極めて困難である。加えてこの研究もまた断片的なものであった。独自の説明がこの研究の主要目的であった。書物の形でまとめて公刊することは当初は意図されていなかった。というのも第一次史料はごくわずかししか利用できなかったからである。まさしくそれゆえにこそヴェーバーは自らの叙述をしばしばおもむくがままにさせていた。彼は自らの思考に方法上の拘束を課すことによって、その思考の本来的な新鮮さを奪い取ることは確かにしなかったけれども、極めてあわただしい作業であったために、その思考はただ部分的にしか明晰な形をとらなかった。ここでもまた彼の作品の未完的性格ということが、良きにつけ悪きにつけ当てはまる。

宗教学的研究の読者に驚嘆とお手上げの感情を同時に呼び起こす、世界を包括した歴史社会学的な考察様式を、ヴェーバーは、次に別の領域へと移した。彼の関心をまずは宗教の分野で捉えた東洋と西洋の対立は、いまや文化的生のあらゆる領域で彼を迎えた。いずれの分野でも彼は、西洋に、東洋が知ることのない一つの同じような合理化過程を見たのである。彼はこの過程を、学問におけると同じく宗教と音楽に、法に、国家の行政と憲法制度に、そして経済のうちに見た。この全体像を説明することを、彼は徐々に自らに課された課題と感じるようになった。こうして彼は、その解決をいわば自らに強いたのである。

というのもヴェーバーは、古めかしくなったシェーンベルク版経済学ハントブーフの代わりとなるべき「社会経済学講座」(GdS)の編集を引き受けるよう説得されたからである。ここで彼は、極めて広い範囲の社会経済学の中で自らの分担部分を自由に選ぶことができたが、彼が『経済と社会』の巻を、すなわち社会のあらゆる領域と経済との諸関連についての全体的な考察の巻を自分用にとっておいたことは、彼の発展を特徴的に示すものである。これこそは、彼の才能とそれまでの研究の普遍的なあり方に最もふさわしいテーマであった。同時に彼は、このテーマを扱うに際して、ごく少数者にしか分かってもらえなかった彼の研究のうちにある統一性を明確に述べて、社会学的研究もまた確固たる基礎の上に構築されうことを示してみよう、という気になった。

これをヴェーバーは意識的な、著しい制約の下で行った。

彼は第一に、ヴィンデルバントやリッカートと同様に、自然科学的手段をもって研究する一切の「自然主義」ないし実証主義を拒否した。彼は、その学問的性格を疑ったのである。

第二に彼は、思弁的に現実を超えてつくられた思想的構成物の一切とかがわることを拒否した。彼は経験的に把握できる現実とのみ関わろうとした。もちろん彼はこのことで、教義的諸観念を学問的に捉えることの正当性を否定したのではない。ただ彼は法学や倫理学、美学といったドグマ的諸学問には手を出さなかった。経験科学は、それに固有の成果の質を低めたくないならば、一切のドグマ的観念を慎重に避けなければならない。

第三に彼は、一切の集合概念を拒否した。彼の提出した多くの「社会学的基礎概念」のなかに「ゲゼルシャフト」概念はない。ともあれ彼は、研究に際しては個々の部分からと同様に、

全体からも始めることができる、という原理的可能性を否定しなかった。彼はその種の試みの学問的存在理由を認めないではなかったが、しかしわれわれは、これまでなされてきたこの方向での試みに対して、それがいかに遠大なものであっても、彼が懐疑的であったことは、はっきりと分かっている。彼は、この方向を見たところ原理的には可能であるが、実践的には採り得ぬものと考えた。

第四にヴェーバーは、合理的でない一切の行為を拒否した。ここでも彼は、そうした行為が生じることを否定したのではないが、それを自分の研究からは外したのである。彼は語の科学的な意味での心理学抜きでやってゆこうと試みた。ここでもまた一見したところ彼は、無意識的で非合理的な行為を解明しようとする社会心理学に対して、原理的に何ら異議を唱えはしなかったが、彼はそれを自らの課題とは見なさなかった。そしてわれわれはここでも、過去及び将来にわたり心理学による解決の試みに対しては彼が大きな疑念をもたずにはいなかった、と感じるのである。

むしろヴェーバーは、古典派経済学を模範にして自らの出発点を選び採った。古典派と同様に彼も、しばしば強調される文化科学の主要特質から出発する。すなわち、それが問題とする最小の部分、つまり諸個人の内面に直接目を向け、そのことにより対象とする経過を自ら追体験することができる。彼は個々の人間の「有意義な」行為から始めて社会的生活を説明しようとしたが、このことは当然、理解可能な合理的行為への限定という結果になる。この限定でも彼は、同じように合理的に行為するホモ・エコノミクスから出発する古典派経済学の模範に従っている。古典派と同様に彼も、心理学に独自の説明を排除して、彼が「シャーンズ」と名付けた「意味に応じた行為が生じる」「計算可能な」蓋然性を確認しようとした。

個人の合理的行為に自覚的に限定するというこの理論を、ヴェーバーは「理解社会学」と呼んでいる。社会学はこれにより「合理化」の叙述となる。だが合理化過程は様々な目的に対して極めて多様な意義をもつ。合理的価値が全面に出るとなると、理解可能なものへの限定によって叙述には一つの強制力が働くようになる。だが非合理的価値が強力に全面に出てくるのに比例して、合理的行為への原理的限定は、本質的なものの無視を意味することになる。支配的な非合理性は、合理的なるものからの単なる「逸脱」へと押し下げられる。その場合には、叙述そのものは誤りだとは言えないにしても、いささか奇異な感じをもつものとなり、容易に動機の解釈がえへと導いて、誤解を避けられなくなる。また孤立化的方法も、たとえそれが全体としてはいかに生産的であることが示されるにせよ、限界にゆきあたる。この方法は、本質的なものに限定されないときには、歪んで作用する。ヴェーバーの重要な宗教史的研究が、方法の正当性を全面的には否定しない多くの人々に拒絶されるのも、まさにこの点に由来する。もしヴェーバーがこの独自の方途を厳格に保持していたならば、拒絶はさらに強いものになっていたであろう。実際には彼の天性の本来的な豊かさが、ここでも束縛を様々に断ち切っていた。それは読者によってしばしばとても心地よいものと感じられるのではあるが、しかし次の

ように言わねばなるまい。この最後の著作をヴェーバーが生んだもっとも重要にして最も特徴的なものとしているのは、彼が主要点においてはやはり理解可能なものに限定した、ということなのである。ここでヴェーバーは、これまでの誰とも違って、社会科学において綱領をめぐる不毛な論争から抜け出し、創造的活動へと到る途を見い出した。彼は新たな途を示しただけでなく、このうえなき改革意欲をもって歩み出した。ともあれ、極端な個人主義が、経済学で行ってきたし、今なお行っているのと同様の役割を、社会学においても演じることになるかどうかは疑って考える余地がある。いずれにせよ今日の社会学は大きな全体像にその関心をかなり一面的に注いでいるために、部分の分析にはごくわずかな関心しか向けていない。ヴェーバーにとりわけ近い研究者たちによって編まれた『追悼論文集』は、そこに「社会学の語で近似的にも同じことを理解する執筆者が2人と」いない、とシュブランガーが評したように、ヴェーバーが彼の道をさらに進んでいこうと決意した弟子を一人も遺さなかったことを示している。いわば、彼の業績の巨大なトルソに対して、必要な補完を加えてやるものは、いまだ誰一人としていないかのように思われる。むしろ、業績がトルソであるために矛盾を引き起こすように作用しているように見える。何しろ、行為する個人への意識的限定は社会学との断交を意味する、ということが注目すべき方面から言われている。彼の採った方向での前進はみられず、彼は「学問をいわば頂点にまでもたらし、まさにそのことによって下降の始まりへと導いた」のである、と(H. カントロヴィッツ)。実際、『追悼論文集』は執筆者の一人によって「衰退せざるを得ない一時代の真摯な記録」と言われている(ホーニヒスハイム)。このことが正しいと言えなくはないのだ。とはいうものの、ヴェーバーの業績は並々ならぬ影響を与えるであろう。だがその影響は、本来の社会学におけるよりも、彼の関わってきた多くの個別科学において示されるであろう。彼は諸科学のうちに様々な新しい問題設定を持ち込んだため、われわれとしては従前の一般的な手法をどこにおいてもそのままではもはや保持しえなくなるであろう。例えば、歴史派経済学がとりわけ注目してきた都市の発展と政策の問題において、ヴェーバーはなんと視野を広げたことか。ヴェーバーの全世界をはじめて包括した叙述に対する態度表明を行わずしては、今後は何びとも、都市について学問的たることの自負をもって書いたり論じたりすることはできないであろう。彼の影響がこれまでおよそ例のなかったほどに拡散しているという、まさにそのことゆえに、この彼の最後の著作も、とくにその第2部では、形式のみならず内容においても、彼が手を加えることなくこれを世に出すことはまずなかったであろうほどに未完という性格を強く帯びていることは、実に惜しむべきである。ヴェーバーもさらにこの著作を拡張する計画であったことは疑いない。例えば彼は戦争直前には新聞の社会学にとりわけ関心をもっていた。その作業についての実質的な計画は、彼の手によってすでにドイツ社会学会で起草されていた。

彼の関心がいかに広いものであったかを最も良く示すのは、おそらく、社会学の主著の第2版に付された論文「音楽の合理的・社会学的基礎」である。たしかにこの論文も合理化過程を

扱い、また西洋と東洋の顕著な相違をも解明しようとした。とはいえここには、主著とはただ緩い関連しかない。むしろこれは、彼の苦難の時期の直接的な産物とみなされるべきであろう。この時期の彼は、規則的にある女友だちのピアノ演奏を楽しんでいたのだが、この演奏を楽しむということの明白さを得ようとする志向がこの注目すべき、音楽家の世界で高く評価される論文を生み出した。

IV

戦争とともにヴェーバーの第三期の展開が始まった。純粋な学者活動への限定はつねに多大な断念を要求してきたが、それが彼にはいまや耐えがたくなった。自らも何らかの形で祖国の危機に直接役立たねばならぬのではないか。それゆえ彼は、当初、ハイデルベルク管区の軍将校病院の組織管理者・規律将校として活動できることを喜び、確固たる責任範囲を手にしたという幸福感の高まりを、少なくともしばらくの間は再び享受することができた。その後、戦争の継続と困窮の強まりとともに、彼は自らの政治的関心からますます強く公的活動へと踏み出した。20年の沈黙の後に、彼は1915年以降、ほとんどあらゆる政治問題について、助言、勧告、警告のペンを執った。彼をそうさせたのは深い義務の感情である。はじめ彼は、政治的な活動など、自ら身体的にそれに耐えられぬと感じていたことからしてすでに、全く考えてはいなかった。

ともあれ戦争末期ごろには彼の活動力は高まってきていた。このことは、彼の政治的著作が学問的著作に見られた外面的な欠陥をもたずに、しかも一部は様式上の傑作となっていた、というところにも示される。その見解の重要性と明晰さにより、彼の著作はまもなく広く世間の注目を集め、ヴェーバーは様々な方面から助言を求められた。なかでも彼は、ヴェルサイユの講和交渉に招かれて、ハンス・デルブリュック、モントグラス伯爵、メンデルスゾーン＝バルトルディと一緒に戦争責任問題におけるドイツ国政府の解答を起草した。後には彼はまたプロイスの招きに応じて、新ドイツの国家形態に関する内密の審議にも参加した³⁾。それから彼は弟⁴⁾とともに新たなドイツ民主党の創設に協力し、党のために大規模な連続政治講演会を行い、そして国民議会の候補者にもなるはずであったが、この件は「凡人たちの野心」のために最後の段階で挫折した。

全体としてみればこの時期には、学者の面は政治家の面の背後に退いていた。だがこの二つの面は、彼の方法論的研究から想定しうるよりもはるかに強く彼の内部で結びついていた。

外面的には政治家としてのヴェーバーはたしかに大きな変化をとげてきた。当初は彼は父の

3) 時間的には逆。講和条約の件は1919年5月、プロイス委員会の憲法草案の件は1918年12月である。

4) アルフレート・ヴェーバーのこと。

信奉していた政治的自由主義に位置したが、その経済的教条主義と政治的な弱さゆえに、どんどん離れて、自己の最初の政治論稿を 自らの独立を証すためであるかのごとく 『クロイツ・ツァイトゥンク』紙上に発表した。だがそれから、徹底した農業研究を通じて東部プロイセンの大土地所有者の鋭い論敵となり、ユンカーの新たな政治のうちに経済的利害関係者の一面的な政策を看破して、ヴィルヘルム2世の統治様式からますます離れていったが、このとき彼は、市民層の中では本質的にはカトリシズムと自由主義だけが対峙している 両親の家から遠く離れた フライブルクにあって、急速に左傾化してゆき、やがて『フランクフルター・ツァイトゥンク』紙のみが自己の論稿公表の場として考慮対象となった。

だが、こうした外面的な変化のうちに内面的な裂け目を見たり、ヴェーバーの政治的態度表明をどこかの政党綱領と同一視するとしたら、それは根本的な誤りとなろう。彼がここでも、まれにみる広さと深さを備えた明瞭な国際的知識を基礎として、独立した、しかも独特な道を、並々ならぬ精神的エネルギーをもって採ってきたこと、このことこそが彼の行使した強い影響力を支えたのである。彼はここでもその思想を先鋭化して結論を導いたため、多くの者がこれに賛成しえなかったにせよ、後の時代の人々はヴェーバーの政治的論争の論稿のうちに、当該領域においてヴィルヘルム時代を際立たせる最も重要な点を見出すことであろう。

それは二つの観点の下におかれている。

第一に、ヴェーバーは、我々の時代を特徴づけているのは「諸価値の混沌」である、というところから出発する。相互に熱い戦いのうちにあるすべての価値の中で、いずれが経済政策を説く者にとって決定的たらねばならないか。ヴェーバーはすでにフライブルク大学就任講演『国民国家と経済政策』においてこの基本問題への答えを与えていた。「ドイツの経済理論家の価値公準はドイツ的でしかありえない。」ドイツの教授は「経済的ナショナリスト」としてのみ、経済学の通例の第2部を扱うことができる。だがドイツ国民国家という観点に導かれるならば、権力政治的観点が支配的となって前面に出てくる。ヴェーバーはこの道を強く踏み出し、「国民の永続的な経済的・政治的権力利害をば他のすべての考慮に優先させる」ことを「理解」し、そうする「力能」をもつことこそが「政治的成熟」なのだ、と捉えた。それゆえ彼は全力をもって「世界政策」を支持した。ドイツ帝国の創設は終点であってはならず、「ドイツの世界権力政策の出発点」たるべきである。子孫はいつか、「我々が世界で彼らのために勝ち取り、残してやった領土の大きさ」を我々のおかげだと考えることになる。「より偉大な時代の先駆者」となることでしか我々は「政治的エピゴーネンの厳しい運命」を免れることができない、と言うのである。

だがヴェーバーは、ドイツ国民がこの課題に耐えられるか否かについては極めて懐疑的であった。彼はドイツの世界政策の内容的な「卑小さ」と、にもかかわらず極めて軽薄で騒がしいやり方でそれがなされていることを、深く嘆いた。そして彼は、他の諸国、例えば小国ベルギーが時を同じくして何を獲得したかを念頭において、ドイツの「植民地の小断片」について語

った。彼は、ドイツ国民の政治教育が充分かどうかを心から心配して再三にわたって問題にした。かつて、いまだ単純な課題が問題だったときには政治的教育を有していたユンカーは、いまや「経済的な断末魔の苦しみ」の中にあった。都市において興隆しつつある経済的な権力は、いまだ政治的教育を欠いていた。とくに労働者層は イギリスやフランスとは違って「政治的に教育されていない俗物市民層」であった。それゆえドイツでは「政治的教育という大きな仕事」がなされなければならず、この仕事に自らの力を捧げることを、ヴェーバーは当初、自らの生涯の課題と感じたのである。

だがそこで彼を不安にさせたのは、時がもはや遅すぎるのではないか、という「深刻な問題」であった。すでに1894年、ビスマルクのベルリンへの撤退のときに彼は、「歴史的無常の冷たい空気を感ず」たように思い、またついには戦争を、自らの陰うつな予感の衝撃的な確証として受けとめた。たとえ政治活動の可能性がいかに狭められていたとはいえ、彼は戦争を、政治問題に対する自らのナショナルで権力政治的な立場を変えるきっかけには決してしなかった。敗戦の前でも後でも、彼は一貫して「戦時の平和主義者」や「文筆家的思考」とは違い 何らかの可能性のあるものなら、国家権力をたよりに救い出し保持しようとしたのである。

ドイツの権力的地位にとっての最大の危機は、彼にはつねにロシアの脅威であると思われた。それゆえ彼はすでに1904年⁵⁾のロシア革命とその担い手に対して、非常に強い専門的そして個人的な関心を示し、ロシア語を学んで、1906年には自らの雑誌『アルヒーフ』の二つの別冊で、ロシアにおける自由の運動に対するより深い理解を喚起しようと試みた。彼の心配があたってロシアが引き起こした戦争の最中にも、彼はこの観点を堅持した。彼はまた、外国に関しては疑いなくつねにロシアに最もよく精通していた。

だが、ヴェーバーの「国民国家」と「世界政策」に対する態度が、彼の世代の自立した政治的頭脳すべてを まれな例外はあれ 衝き動かしたものを体現しただけであったように、彼の外交政策的な論稿も、全体としては後まで続くような強い刺激を欠いている。また彼の書いたものの中には、いろんな外国旅行で得た知見の驚くほどわずかな痕跡しか見出せない。

これに対して、政治家としてのヴェーバーの心をますます強く占めるにいたった第二の観点はいささか特別であった。それは、またもや、ヴェーバーが経済学から得た見方を他の領域に移していたことに根拠をもっていた。すなわち、彼は国家のうちにも「経営」を、しかもますます自己拡張しゆく傾向が内部に作用している大経営をみたのである。この経営の合理的形成においては、ドイツは戦争までに世界の先頭に立っていた。ドイツは「高潔さと教養、良心、知性の点で他に抜きん出た軍事的、文官的官僚制」を有した。「我々はこの点では世界一であった。」ここに我々の「他に対する優越」があった。にもかかわらずヴェーバーは、官僚制化の進行というこの過程に対しては心の底に恐怖を抱いていた。彼は官僚制のうちに「およそ逃

5) 1905年の誤りであろう。

れることの出来ない唯一の力」を見た。それは諸個人のすべての自立性を脅かす。それはまさしく「おそらくはいつの日か人間が、古代エジプト国家の土民のごとく、力なく強制を受け入れる定めとなるような、未来の隷属の檻をつくりあげている」のである。われわれはその力の特性を極めて慎重に把握し、対抗的統制諸力を通してその力を制御しなければならない。

官僚制の特徴は、あらゆる大経営におけると同様、労働者と物的経営手段の「分離」にある。そこから二つのことが帰結する。第一に、官僚個々人は、個々の工場労働者や職員と同じく、もはや全体についての見通しをもちえない。そして第二に、全体は、すべての者が奉仕する肢体として全体へと従順に編入されることを要求する。かくして大経営の中で、指導的精神にとって必要な性格や知識などは発展しない。責任の取り方は、官僚にあっては企業家ないしは政治家におけるのとは全く異なっている。官僚の場合なら賞賛に値することが政治家では軽蔑される。

ここからヴェーバーは、官僚支配は国家にとって危険である、と結論づける。それゆえに、国家の意思決定に際して官僚層の他にいかなる要素が考慮されるかということは最大級の意義をもつ。それが君主制と議会である。

ヴェーバーはたしかに「大規模国家における君主制の効用」を確信しており、イギリスの君主制を「英国議会主義の強さ」と賞賛し、とくにドイツの特殊な国際的状況から見て「そもそも」立憲君主制が「所与の国家形態」だと考え、外国が喧伝したドイツの自給体制⁶⁾からの解放というスローガンを「偽りの空文句」だとした。だが彼は、ヴィルヘルム2世の統治様式に危険な「ディレッタントイズム」を見ていたのであり、これについてはすでに1906年より、これが「わが国のすべての世界的地位」を脅かすであろうことを怖れていた。従って現実の君主制は、欠くべからざる専門知識の補完および統制という点では、機能しなかった。むしろ君主制も補完と制約を必要としていたのである。しかしそれゆえにこそヴェーバーは君主制を排除しようとはしなかった。敗戦の不可避的帰結としてのみ彼は共和制を受け入れたのであって、彼はそもそも国家形態の「技術的な問題」を、統治組織の問題に較べれば重要ではない、と考えていた。

後者については彼は議会に重点をおいた。「ビスマルクのとてつもない偉さ」の圧倒的影響下にあったドイツで、議会は発展を遂げたが、それにとどまらず「不承不承に容認された承認装置」へと貶められてしまった。その中からは指導的政治家は出てこなかった。しかも帝国宰相は帝国議会の議員ですらありえなかった。そのため、悲しいかな議会は指導者の才能の持ち主にとって魅力がなかった。そういう人たちは経済の世界へと追いやられていった。

こうしてヴェーバーの到達した結論は次のようなものであった。ドイツでは、健全な国家的意思形成が可能ではない。イギリスの「名望家クラブ」であのように息づいているような貴族

6) 自給体制 Autarchie ではなく、専制 Autokratie となるべきところ。

的伝統をなんらもっていないだけに、なおのことそうである、と。

この困難な状態からいかにして脱することができるのか。ヴェーバーはこれに答えた。「非支配者のうちの少なくとも社会的に重要な諸層の最小限の内面的同意」これなくしては今日いかなる支配も長期的に存続しない を確保するために、またとくに、現在欠けている政治的指導者を議会によって育成するためにも、議会は制度的改革を必要としている。この最も重要な目標を達成するためには、基本的に議会から政治的指導者を出すことが、つまりは議会主義が必要である。こうすることでのみ、政治には適さない官僚の政治的影響力を削ぎ、国家の権力をめぐる闘争にむけて職業的に訓練された人物を官僚の代わりにおくことができる。このことが成功裡に進むか否かは、ひとえに、議会が「ディレクタントの無知にとどまる」ことのないよう、行政に対する有効な統制の権限を手にして、そのことにより無益なおしゃべり議会を「強力に作動する議会」に作り替えることができるか否かにかかっている。

今日我々はこう言わねばならぬ。「指導者精神と官僚精神」の問題は現実にはヴェーバーが描いているほど単純ではない、と。職業政治家精神の発展のために示された道は実際にそれほど確実で、危険のないものだろうか。自分の個人的権力のための利己的な闘争から、ヴェーバーが想定するような「あることがらに対する自己責任」が育ってくることを保証するものは何か。議会と不可分の現代の政党運営の中で、ヴェーバー自身が最も重要だと考えた責任感の強化が、現実に達成されるのか。それよりもむしろ、前述のイギリスの貴族的伝統を欠く国では、職業的政治家精神が絶えざる利己的闘争の中で、軽蔑すべきアメリカ的な「機構（マシーン）」の水準に下がってしまう、という危険が生じるのではないか。

そしてヴェーバーは、このような疑念の余地ある職業政治家に対して歴史的にはまず正当化されない過大評価を下す一方で、官僚精神に対しても少なくとも一面的な評価を下している。なぜヴェーバーは、他の所ではしばしばやってきた経済活動からの類比という道をここでは採らなかったのだろうか。経済では、職員の教育を高め、それによって企業家的地位への選抜をうまく機能させることが試みられ、しかも成功を収めてきた。これと同様のことが、官僚の訓練によって達成されないであろうか。ヴェーバーは、官僚層の中に「指導者の資質を備えた人々もいるかもしれぬ」ことを否定はしない。ならば、そうした人々を探し出して育てていく試みを行う方が正当であり、かつ容易ではないだろうか。その場合には、ヴェーバーも認めるドイツ官僚層の利点、しかも伝統なき職業政治家精神によって劣化させられてしまえば消滅するかもしれぬ利点を、維持することも可能であろう。統治組織の歴史的特性を無視すれば、きまってしっぺ返しにあう。真に将来性豊かなものは、つねに歴史的土壌からのみ育ってきた。非合理性が大きな役を演じる政治活動にあっては、改築の方が新築よりもたいていは容易である。健全な伝統を人為的に創りだすことは容易ではない。

ヴェーバーの主張した統治組織の合理化に対するこのような批判は、極めて分かりやすいものだから、ヴェーバーがこれを考慮しなかったことには驚かされる。それゆえ人はおのずと説

明を求めてしまう。恐らくヴェーバーは、危機的な時代にあって、すべての教育的課題がそのような長い時間を必要とする提案は一切断念し、早急に実行可能な外面的な組織変更に限定せざるをえないと考えたのであろう。恐らく彼は、一つの目標だけを掲げて、歴史的諸条件への適応を今後の発展に委ねようとしたのであろう。

だが、いずれにせよヴェーバーの政治的諸論稿、中でも重厚な内容でそれらの首座を占めるであろう論説シリーズ「新秩序ドイツの議会と政府」(1918)は、凡般の政党政治的イデオロギーとは何らかかわりをもたぬ重要な業績として今後とも認められるであろう。囚われのない眼には、慎重に分析する学者が一面的な要求を掲げる政治家に替わってしまった破綻箇所がはっきり見える、ということはあるけれども。彼の政治論稿は、その結論によってではなく、その論拠づけによって、ドイツ国民の深い政治教育に今後永きにわたって貢献しうるものである。

V

政治の議論に深く入っていききたいという内的衝動がヴェーバーのうちに強く湧き上がったのではあるが、政治と身近にふれあったことは、政治に反発を覚えるという影響を彼に与えた。彼はすでに敗戦の前にまた学問的作業へと逃避して、1918年の夏には19年間の中断後再び大学の講壇に、しかもヴィーン大学の講壇に就いた。ここで彼は「唯物史観の積極的批判」と題して、自らの宗教・国家社会学的研究の概要を講じた。しかし、大きな成果を収めたとはいえず、二時間の講義は彼をいたく消耗させてしまい、彼は職の継続を断念しなければならない、と考えた。

敗戦後のベルリンとヴェルサイユでの政治的経験も同様に、政治は彼自身が言うには今では実り多き営みではない、と彼に確信させた。と同時に、彼には、時代の混乱のゆえに青年の教育がとりわけ大きな意義をもつことになったように思われた。それは再建に向けた最重要課題の一つになっていた。それに力を捧げることは今ややりがいのあることであり、ヴェーバーは、ヴィーンの時とは違って、身体の調子もそれをこなせるほど良くなったと感じてもいた。それゆえ彼は1919年の夏、ミュンヘン大学のブレンターノの講座への招聘を受諾できたことをとても喜んだ。そこでは経済的なテーマではなく、彼の新たな研究に応じて社会学的なテーマのみを扱えばよかつただけに、なおのこと喜んだのである。

だが以前の経験がミュンヘンでも再現した。彼の人格は聴講者たちにますます強い印象を与え、彼は学生の間で人格的助言者としてただちに影響力をもった。とはいえ、6月によやく始まった彼の「社会科学の一般的諸範疇」の説明はほとんど理解されなかったため、彼は冬学期には学生の要望に従って「一般社会経済史要論」という2時間ものの講義を行った。彼はまた以前と同様に、講義を非常に消耗する負担と感じて、この新たな正教授職を非常勤職に代えてもらう申請を提出すらした。実際、1920年7月14日の彼の早すぎる死が、講義によるこの多

大な「過労」に関係があるという印象は免れない。

死はヴェーバーをその執筆の収穫期の最中に奪ってしまった。

1895年の大学就任講演以来、彼は学術的研究のどれ一つとして独立した形で出版してはいなかった。ヴェーバーの研究が分散しているため、彼の作品の全体像をえることは、個別専門領域の同僚にとっては容易でなく、彼と縁遠いものにとっては不可能であった。戦後になってようやく彼はまた包括的な書物の出版を計画した。1919年に彼は社会経済学講座中の大冊『経済と社会』の印刷を開始し、自分の講義との緊密な連携のうちに出版へとこぎつけることを期待していた。同時に、今回もまた様々な要請により、彼は自らの宗教的研究を、しかも「社会的」研究として、3巻本で出版しようとした。彼はその第1巻を1920年にさらに修正した。だが両方の著作が出版されたのはようやく彼の死後であった。しかも講座の大冊の刊行には、多大な努力にもかかわらず部分的にしか克服しえない極めて大きな困難があった。したがって刊行は数年の間にまずやむを得ない分冊の形で行われた。大部の4巻本のなかにヴェーバーの諸論稿が編集された。そして妻はさらにミュンヘン大学の経済史の講義を、文書資料的には根底的な欠陥があるにもかかわらず、編集して出版することを最終的には決心した。こうして、ヴェーバーの影響にこれまでわずかな注意しか払ってこなかった人々すべてに対し、彼の膨大なライフワークがようやく姿を現わした。彼が生存中にはつねにごく小さな仲間うちでしか影響力をもたなかったのに比して、全体としてみれば死後になって影響力を勝ち得たのは、まさしくこうした事情のためである。

同時に、彼の生の中心的な秘密と悲劇が最後になって明らかにされた。これは注目すべきことなのだが、ヴェーバーが自分で刊行した最後のもの、つまり二つの講演「職業としての学問」と「職業としての政治」は、同時に二十世紀に入ってから彼の最初の独立した非政治的な刊行物ということになったのである。彼はこれらの講演において、いわば自らの悩みに悩んだ学問的なライフワーク（生涯の作業）の人間的な帰結を要約した。

科学は、証明可能なものに限定されねばならず、合理的な経過の主知的解明にのみ関わるものであり、そのため不明瞭なもの、幻想などをすべて除去しなければならず、そのことによって世界の「呪術からの解放」と、諸価値の闘争を解き放つことに到るものである。それゆえ科学は人がどう行為すべきかを教えることはできない。科学はそれがもたらす明晰さを通して責任感を研ぎすますだけであり、そのことによって「価値の混沌」のただ中での選択をいっそう困難にする。にもかかわらず人は選択せねばならない。というのも、「理想、課題、義務」への無私の没入のうちのみ、人間的現存在の意味と尊厳があるのだから。すべての人はこれを自らつくり出さねばならぬ。人は「自己の生の導きの糸を握るデーモンを見い出してこれに従わ」なければならない。だが人はそれをどう見つけだすべきなのか。もし科学がこの世の生起のうちの一つの意味として示すことができないとしたら、人はいかにして自らの生に意味を与えるべきであろうか。当の選択が現実の意味をもつか否かを人が知りえないとすれば、なおのこ

と、人はいったいどうやって意味付与すべきであるのか。そのような選択にとって必要な信念を、人はどうやって我がものとするべきなのか。

ヴェーバーの人格と生の偉大さは、彼がこの選択をいかに行ったのか、そして彼以前にはおよそ例を見なかったような幻想と無縁な態度と、熱のこもった努力とをいかに結び付けたのか、という点にある。人は政治家となるためには、そうした情熱と、「判断力」すなわち「精神的な集中と平静さをもって現実をそのものとして受け止める能力」とを結び付けなければならない。だが、「生の現実を見つめる訓練された容赦のない眼力」だけでなく、さらには「現実へ耐え、これを精神的に克服する能力」も必要とされる。世界が自己の観点からみて、自らの達成すべきことがらに比すればあまりに愚かしく、あるいはあまりに低俗であるときにも、これにくじけず、いかなることが生じても「にもかかわらず！」とすることができる者、そういう者だけが「政治への召命」をもつのである。ヴェーバーは1897年の精神崩壊以降、幾度も激しい義務感に突き動かされて政治的議論に立ち入っていったことは確かにあったけれども、この内なる確かさの感情を二度ともつことはできなかった。だが心の内奥で彼は、自らが学者と政治家に課した相互に対立する高次の要請を結び合わせることができた。たしかに実践のための主たる障害は彼には無くなっていった。教壇では矛盾は不可能であるため、矛盾にすらコミットする信仰者の勇気はそこでは排除されることになるが、この教壇にヴェーバーが教師として立ったのは、1897年以降、ほんの数カ月でしかなかった。むしろ彼は、知識と思考方法のみならず確信と信条がやりとりされる人間と人間の人格的交流をこそ必要としたのである。まさしくそれゆえに、彼の人格は、書かれたものの外では、教壇の大学教師に許されて可能であったものよりも自由に開花できた。ヴェーバーの生存中には、学者と政治家への相対立する要請が満たされていたこの積極的な模範像と、同時に他人に勇気を与えてくれる彼の人格の力とが前面に出ていた。彼の死とともに、彼の著作に含まれる否定的な面や矛盾する面が、またそれとともに彼が要請することの実行の困難性が、一面的にそして危険な形で前面に出てきている。彼はさらに何をなすことができたのであろうか、それを他者はいかになすべきなのか。

こうした疑問は彼の理論にも広がってゆく。それは凝縮されて次の問いになる。すなわち、非合理的な価値は実際に個人的な意義しかもたないのか、諸価値の客観的秩序は可能ではないのか、という問いである。この問いが将来にわたってさらなる討議を司ることになるろう、現在のところ、そのように思われる。

文献：今日すでにヴェーバーに関する一連の研究文献が、彼の主要著作の断片性といった極端な特性を打ち出している。とくに以下の研究が強調されるべきであろう。v. Schelting, Die logische Theorie der historischen Kulturwissenschaften von M. Weber und im besonderen sein Begriff des Idealtypus, Archiv für Sozialwissenschaft, 1922. Rothacker, M. Webers Arbeiten zur Soziologie, Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 1922.

Othmar Spann, Bemerkungen zu M. Webers Soziologie, Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik, 1923. Hans Oppenheimer, die Logik der soziologischen Begriffsbildung, 1925. Andreas Walter, M. Weber als Soziologe, 2. Jahrbuch für Soziologie, 1926. Koelreutter, Staatspolitische Anschauungen M. Webers und Oswald Spenglers, Zeitschrift für Politik, 1925. Grab, Der Begriff des Rationalen in der Soziologie M. Webers, 1927. v. Kahler, Der Beruf der Wissenschaft, 1920.

また作品と人格はヴェーバーにあっては緊密に結びついているため、彼の活動と人格についてもすでに一連の研究が出されている。その筆頭に来るのは、1926年にマリアンネ・ヴェーバーが亡き夫に捧げた七百ページを越える大著である。これは愛情と尊敬の麗しい記念碑であるにとどまらず、書簡と記憶を大量に利用したことにより、価値ある資料にして感情細やかな人物像でもある。まさしくそれは、著者が純粋に個人的に書いたものの多くの中に全時代が反映されていることにより、この半世紀の一つの文化像にまでなっている。もちろんヴェーバーから遠くにあった者からすれば多くのことはいささか違って描かれるし、後世が光と影をいささか別様に判断するであろうことも、すでに今日、示されている。

ヴェーバーの全人格に捧げられた著作のうち、他になお強調に値するものとしては、1926年に第2版が出た K. ヤスパースのうるわしい追悼講演、R. ミヘルスがその著書 *Bedeutende Männer*, 1927 に収めたニュアンスの富む特徴づけ、1923年のパリュイ編『追悼記念論集』(Erinnerungsgabe) の Schulze-Gaevernitz による序文、そしてホーニヒスハイムの論文 *M. Weber als Soziologe. Ein Wort zum Gedächtnis*, *Kölner Vierteljahrsheften für Sozialwissenschaften*, 1921がある。

はしがき

著者のシューマッハー (1868-1952) はイェナ大学で法学博士となり、のち1904-17年にボン大学、1917-35年にはベルリン大学の教授を務めた。(Max Weber Gesamtausgabe, Abteilung II: Briefe, Band 6. Max Weber Briefe 1909-1910. Hrsg. von M. Reiner Lepsius und Wolfgang J. Mommsen in Zusammenarbeit mit Birgit Rudhard und Manfred Schön. 1994 Mohr の人名索引による。) ヴェーバーがモール出版社社主に、経済学ハントブーフの新版企画のさい、編集者として薦めた人物である。この点の詳細については、拙稿「マックス・ヴェーバーの GdS 編纂」『立教経済学研究』56(1), 2002, を参照頂きたい。1890年代初頭にヴェーバーと交友関係に入っており、本稿でも、当時ヴェーバーが周りの人々にどう見られていたかを生き生きと語っている。この邦訳紹介の目的は、その点も含めて、同時代の経済学者のヴェーバー観の史料を提供することにある。目新しい論点があるわけではないが、歴史から社会学への移行と方法の問題、経済人モデル、経済的思考の適用などの部分は、経済学者らしい叙述となっているように読めた。時代の思潮のゆえかもしれぬが、シュブランガーへの言及や「諸価値の客観的秩序」という表現は、著者の新カント派的立場をうかがわせている。また政治家と官僚の類型的峻別に関しては、官僚養成機関たるベルリン大学教授として、言うべきことは言っている。ともあれ「ヴェーバーという人格」に魅せられた者に彼の悲劇性がどう映ったかを示しており、この点では興味深い伝記となっている。この論稿はすでに嘉目克彦氏作成の文献目録(『知の考古学』1976年第8・9合併号)に拾われていたが、

訳者は2003年3月にテキストを入手した。なお、2003年度社会思想史講義受講者には訳稿に訳注を付したものを講義資料として配付した。『スモール・イズ・ビューティフル』の著者エルンスト・フリードリヒ・シューマッハーはヘルマンの次男である。